

あゆみ坂

校訓／教育目標
誠実 明朗 協調 勇気
自立心と感謝の心をもち、
進んで他者や社会に貢献する生徒の育成
～笑顔の登校・感謝の下校～

宇城市立小川中学校
令和7年度第27号
(12.19)
文責 岩田 雅子

全国中学生人権作文コンテスト熊本県大会 NHK熊本放送局賞

「差別のない世の中を目指して」

一年一組 古島 ひなた

みなさんは「望郷の窓」を知っていますか。これは、ハンセン病患者を隔離するための施設、菊池恵楓園に実際にあります。日常を壁で閉ざされ、暮らしている入所者の方たちが外の世界を見たいと、壁に穴を開けます。それが「望郷の窓」です。中には子どもが開けたであろう、低くて、小さな穴もあります。

今年の夏、「菊池恵楓園で学ぶ旅」に参加してきました。恵楓園はらい菌に感染した方たちが、国の政策によって、強制的に連れてこられた施設です。らい菌は感染力がとても弱く、薬で完全に治る病気です。しかし、顔や手足に生じる後遺症のため周りから恐れられ、ひどい差別を受けてきました。今回、心に残った三つのことを話します。

一つ目は、平成十五年に熊本県で起きた「黒川温泉宿泊拒否事件」についてです。この事件はホテルを予約していた恵楓園の入所者がある日突然、ホテル側から「宿泊させられない。」ことを告げられました。さらに、園内の資料館には、当時の入所者の方たちを批判する多くの手紙が展示していました。その中のいくつかはとてもひどい内容でした。「お前たちは、人間ではない」、「温泉に入らず、骨壺に入れ」。こんなひどい言葉が手紙には書かれていて、読み進めるうちに、自然と涙が出てきました。同じ人間なのに、どうしてこんなにひどい言葉を言えるのだろうか、悲しい気持ちになりました。入所者の方もきっと同じ気持ちだったことでしょう。傷つかれたことでしょう。一方で、励ましの手紙もあり、温かい言葉も数多くありました。そのことは本当に良かったです。そのような温かな言葉の数々に触れることで、人の心は言葉一つで、希望を与えるものへと変わっていくということに気づきました。

二つ目は、資料館に展示されていたある入所者の方が作った短歌についてです。心に残ったのが、「電報を 握りたるまま 術もなし 母は死ねども 行かれざりけり」です。これはふるさとの母親が亡くなつたという電報が届いたが、ここ恵楓園から外に出ることは出来ない悲しくつらい気持ちを歌ったものです。これを書いた人は、どんなに悔しく、無念だったでしょう。まるで「望郷の窓」のように外の世界がいかに自分のいる世界とかけ離れており、家族と会えないことがどんなにつらいか、この歌から伝わってきました。

三つ目が、入所者の方たちの講話を聴いたことです。自身の生き立ちについて、驚くべきことを話されました。それはこんな言葉でした。「私は、自分がこれまで不幸だと思ったことは一度もありません」。私だったらとっくに人生に絶望していたことでしょう。自分は世界一不幸な人間にちがいないと、毎日、落ち込んでばかりいたことでしょう。どうして、このように人生を悲觀することなく、日常を送ることができたのでしょうか。さらに小学生の頃、県内で起こった通学拒否事件でも大人と一緒に抗議のデモ行進に参加されたそうです。おかしいことはおかしいと、堂々と差別に立ち向かうその姿に心を打たれました。このようにこれまで差別と闘い、前向きに生きておられる方もたくさんいらっしゃいます。どんなに厳しい境遇に置かれていても、前向きに生きていこうとされる姿から私は多くの事を学びました。

恵楓園では、どんな思いで入所者の方たちが日々を過ごしていらっしゃるのか、これまでどんなひどい差別と向き合ってこられたかを知ることが出来ました。そして、改めて差別はなくしていかなければならぬという気持ちがより強くなりました。それは決して簡単なことではないでしょう。まずは一人一人が正しい知識を持ち、誤った情報は修正していかなければなりません。水俣病の患者さんやコロナ感染者への差別や偏見ともつながると思います。決してネットの情報だけをうのみにしない、相手の気持ちを考え、発言したり、行動したりすることが大切なのです。

これから私は恵楓園で学んだことを周囲の人たちに伝えていきたいです。そして一人でも多くの人が恵楓園を訪れ、ハンセン病のことを正しく理解してほしいです。みんなが正しく学べば差別や偏見は必ずなくなる、このことを信じ、これから私は生きていきます。

私たちの身の回りには、深刻な悩みや苦しみを持つ人がいます。それは、家族のことだったり病気のことであったり、性の問題であったり、国籍など様々です。本校では、まだまだ人のことを茶化したり、いじったりする場面があるようです。お互いのことを理解できる学校をみんなで目指しましょう。